

家に帰らない旦那様——のはずだった。

結婚前に聞いた話では、カイゼル様が屋敷へ帰るのは月に数日ほどしかない。

軍本部へ泊まり込むことも多く、遠征へ出れば数か月帰らないこともあるという。

だから私は、結婚後も一人で好きなだけ本を読めると思っていた。

それなのに、カイゼル様は結婚してから毎晩欠かさず帰ってくる。

そして今夜も——。

「なんだ、エレノア。まだ起きていたのか」

「お、おかえりなさい……!」

寝室の扉が開いた瞬間、思わず勢いよく身体を起こす。

「遅くなるから、先に寝てろと言っただろ?」

「……本を読んでいたら、偶然こんな時間になっただけです」

「その本、逆さまだぞ」

「……………っ」

カイゼル様が楽しそうに目を細める。

「寂しくて、俺の帰りを待ってたのか？」

「ち、違いますっ……………！」

「夫としては、素直に甘えてほしいんだがな」

湯浴みを済ませたカイゼル様が寝台へ入ってきて、後ろから私を抱き締める。
一日ぶりに触れる体温と、慣れ親しんだ匂いに、胸の奥がほっとした。

「……カイゼル様」

「どうした？」

「もう眠るのですか？」

「朝から仕事だったからな。エレノアも眠いだろ？」

「そうですね……………」

「なんだ、何かしてほしいのか？」

耳元へ落とされた声が、急に低くなる。

「ち、違いますっ……！」

「じゃあ、どうしてももう眠るのかなんて聞いたんだ？」

首筋へ軽く口づけられ、腰に回された腕へ力がこもる。

「んっ……」

「エレノア、ようやくセックスしたくなったか？」

「……………っ」

言葉にはできないまま、もっと触れてほしくて、カイゼル様の身体へそっと擦り寄る。

「ちゃんと言葉にしてくれないと、分からないなあ……エレノア、おまんこを気持ちよくし

てほしい、いっぱいエッチしたいって言ってごらん」

低く掠れた声が、熱い吐息とともに耳元へ落とされる。

そ、そんなこと言えないっ……！

「む、無理ですっ……！！」

「そうか。じゃあ、ここまでだな。おやすみ、エレノア」

私の頭をポンポンと撫で、カイゼル様は目を閉じてしまう。

うう……おまんこが疼いてつらいのにっ……！！

でもっ……絶対、自分からおねだりするなんて無理……！！

家に帰らない旦那様と、静かで自由な結婚生活を送るはずだった。

それなのに、どうして私はこの人の帰りを待ち、抱いてほしいと思うようになってしまったの……！！？

すべての始まりは、国王様と王妃様から突然縁談を持ちかけられたことだった。

1家に帰らない旦那様と、形だけの結婚をするはずでした

「お嬢様。国王様と王妃様がお呼びのようです」

「……………何の用かしら？お茶の誘いじゃなくて？」

「はい。国王様の執務室に来るようにとのことです」

王城の図書室でいつも通り本を読んでいると、侍女のマリッサが声をかけてくる。

国王様の側近として働く父に連れられ、幼い頃から王城の図書室へ通っていた私を、国王様と王妃様は今も可愛がってくださっている。

「お茶の誘いでもない……………なんだか嫌な予感がするのは気のせいかしら……………？」

重い足取りで執務室に向かうと、お2人はにこにこ顔で出迎えてくれた。

「いらっしやい、エレノア」

「さあ、ここに座りなさい、エレノア」

「……………はい」

絶対に何かを企んで……………！

私がふかふかのソファ―に腰を下ろした瞬間、王妃様が口を開いた。

「エレノアは、好きな男性とかいるのかしら？」

「きゅ、急になんですか……………！！」

「いないだろう？」

と、わかったように突っ込んでくる国王様。

「いないですけど……………それがどうしたんですか？」

「そろそろ結婚のことを考えてもいいのではないかしら？今年で23歳になるでしょう、エレノア」

うう……………ついに面と向かって結婚話をされてしまった……………。

「けっ………こん………」

したくない………！

ずっと図書館で本を読んでぼーっとしていたいし、お母様やお父様から離れたくないし、あの家じゃないと落ち着かないし、国王様や王妃様とも毎日お茶してまったりしたいし………！

それに………男の人………好きじゃないし………！

結婚したくない理由を頭の中で考えている私をよそに、話を進める二人……。

「それでね？エレノアにお似合いの人を私たちが見つけてあげるわ」

「え………！！？」

「早速、来週、お見合いを組んだから楽しみにしていてね。もちろん、あなたとご両親にも許可をいただいているからね」

日程まで組まれている………！？

私の両親の許可まで……!？

本気だ……………。

「私とのお見合いを受けてくださるなんて……一体どこの誰ですか……………?」

嫌だけど……国王様と王妃様がせっかく私のために組んでくれたのだから、そう簡単に断るなんてできない……………。

まあ、会って、上手くいきませんでした、で断ればいいかしら……………。

「さっそく興味を持ってくれて嬉しいわ。あなた、エレノアに教えてあげて」
「相手はね、カイゼル・アルヴァ侯爵だよ。男に興味がないエレノアでも、さすがに知っているだろう?」

「し、知っているも何も、王国軍を指揮するトップのお方ではありませんか……………!」

正直、それ以外よく知らない……………。

舞踏会で会っても、軽く挨拶をする程度だから……………。

「さすがに知っていたか。こんなかわいいエレノアをちゃんと守れる男じゃないと私たちも安心してお嫁に行かせられないからね。その点、カイゼル殿は文句なしだろう」

私のためにお二人が計画してくれたんだから、今更断るなんてできない……。

こうなったら、カイゼル様のことを調べて、結婚相手として致命的な欠点を見つけないわ……！

国王様と王妃様も、「この方とは合わない」と納得してくださるような、ものすごい欠点を……！

★★★

「エレノア？どこかに出かけるの？」

玄関でコソコソしている私に気づいて声をかけてくるお母様。

「ちょっと、街に……」

「いいけど、ちゃんとルイについていってもらうのよ。あ、夕方には帰ってきなさいね」

「……どうして？今日はなんの予定もなかったと思うのだけれど……」

「今度のお見合いのドレスを新調する予定でしょう？エレノア、まさか、お見合いのこと忘れてるんじゃないでしょうね……？」

「そ、そんなことないよ……ちゃんと夕方までに帰ってくるつもりでした……！」

「そう、ならいいけど……ルイ、エレノアをよろしくね」

「はい」

どこからともなく現れたのは、この家の執事兼、私の護衛のルイ。

ひらひらと手を振って、部屋に戻っていくお母様。

「ルイ」

「はい、お嬢様」

「カイゼル様のことを調べられるような場所に私を連れて行ってほしいの……！」

「……………はい？」

「と、とにかく、馬車に乗りましょう……ここでは話せないわ……………」

馬車に乗り込んで、ルイに事情を話す。

「来週、カイゼル様とお見合いしないといけないこと、ルイは知っているでしょう?」

「もちろんです。旦那様から、お嬢様が逃げ出さないように見張ってほしいとお願いされていますから」

「逃げはしないけど……そんなお願いされていたのね」

まずいわね、ルイはお父様側だわ……。

この計画がバレないようにしないと……。

「で、カイゼル様を調べたいとはどういうことでしょうか?」

「お見合いの前に、どんな方なのか知って、仲を深めるための材料にしようかと思って……!」
「……そういうことでしたか。でしたら、王城近くの食堂がいいでしょう。騎士団に人気のようです。昼は女性にも人気のようですので、お嬢様が入っても目立ちませんし」

「さすが、ルイね！そこに行きましょう……………」

★★★

目的の食堂は、家から馬車で十分ほどのところにあった。

「ちか……………」

「この日替わりランチがおすすめですよ」

「……ルイは来たことがあるよね？」

「もちろんです。旦那様の仕事で王城に来た時は、いつもお昼をここで食べてます。昼はガッツリ食べたいので」

「だから、騎士団がよく出入りしてるって知ってたのね」

「あ、お嬢様。彼らの席の近くがよいではありませんか？」

ルイが目線で示した先には、訓練着姿の騎士たちが五人ほど集まっていた。

「……そうね。できるだけ近くに座れば会話を聞けるわね……………」

「盗み聞きをするおつもりですか？」

「ち、違うわ。偶然聞こえてしまったお話を、今後の参考にするだけよ」

「それを世間では盗み聞きと呼ぶのですが」

「ルイ。日替わりランチをご馳走するわ」

「全面的に協力いたします」

私たちは騎士たちの斜め後ろへ腰を下ろした。

メニューを開き、料理を選ぶふりをしながら、そつと耳を澄ませる。

「それにしても、総司令官は昨夜も軍本部へ泊まったらしいな」

——来たわ……………！

私はメニューで口元を隠した。

「アルヴァ侯爵って、本当に家へ帰らないよな。先月なんて二日くらいしか帰ってないん

じゃないか？」

——月に二日……？

お仕事が忙しい方なのね。

「夜会へ出れば女に囲まれてるし。あの人、結婚して家庭に収まるような男には見えないよな」

——女性にも、家庭にも興味がない……？

私の胸が、期待で高鳴り始める。

もしかして私、とんでもなく理想的な結婚相手を紹介されたのでは……？
形だけの結婚になる可能性が高いのでは……！！？

「お待たせしました」

「ありがとうございます………お嬢様、来ましたよ」

「ええ………いただきます……！」

その後の会話はこれと言って参考になるような話ではなかった。

「ふう……おいしかった」

「よかったです」

美味しすぎて、ちゃっかりデザートまで頼んでしまった。

「あ、本屋に寄ってもいいかしら？」

時計を確認するルイ。

「いいですよ」

馬車に戻って、本屋へ向かう。

「ルイ……！予想以上の成果だったわ……！連れてきてくれてありがとう」

「それはよかったです」

あとは、カイゼル様本人に確かめるだけね……！

★★★

一週間後――。

王城の庭園に用意されたお見合いの席へ向かうと、カイゼル様はすでに座って待っていた。

赤みを帯びたダークブラウンの髪に、鮮やかなエメラルドグリーンの瞳。

軍服越しでもわかるほど鍛えられた大きな身体は、遠くからでもよく目立つ。

「こんにちは、エレノア」

私に気づいたカイゼル様が、親しげな笑みを浮かべて立ち上がる。

「本日はよろしくお願いいたします、カイゼル様」

ふわりとドレスを広げて挨拶をする。

「俺との見合い話を受けてくれて嬉しいよ」

「いえ……こちらこそ、ありがとうございます」

「そんなに身体を固くしないでくれ。初めて会ったわけでもないだろう？」

カイゼル様は近くにあった椅子を引き寄せ、自分の隣へ置くと、座面を軽く叩いた。

「ほら、座って」

「向かい側ではないのですか……？」

「そんなに離れていたら、仲良くなれないだろう？」

「いつも軽いご挨拶しかしたことはありませんが……ありがとうございます」

促されるまま、カイゼル様の隣へちょこんと腰を下ろす。

近い……。

肩が触れるほどではないけれど、大きな身体がすぐそばにあるだけで落ち着かない。私がわずかに身体を横へずらすと、カイゼル様の口元が楽しそうに緩んだ。

「これ以上近づいたら、逃げられそうだな」

「に、逃げません……！」

「そうか？まあ、今はこのくらいにしておこうか」

びっくりした……。

侍女がお茶を淹れ、その場を離れる。

何を話せばよいのかわからずカップを見つめていると、カイゼル様がこちらへ身体を向けた。

「せっかくだから、お互いに質問をしようか」

「質問………ですか？」

「そう。一つ答えたら、今度は相手へ一つ質問する。見合いらしいだろう？」

「……………わかりました」

チャンスよ……………！

この前騎士たちから聞いた話が本当なのか確認しないと……………！

「じゃあ、俺から。エレノアは普段、何をして過ごしてる？」

「本を読んでいます。王城か自宅の図書室にすることが多いです」

「一日中？」

「一日中いることも多いですが……王妃様とお茶をしたり、お父様のお仕事を少しだけ手伝ったりしています」

「へえ。どんなジャンルの本が好きなんだ？」

「色々です……………！恋愛ものも好きですし、冒険ものも好きです！」

「そうか。では、俺の家にある図書室にもっと本を増やさないとな」

「えっ……………！！？カイゼル様のお家にも図書室があるのですか？どういった本を揃えているのですか？」

思わず、前のめりになって質問してしまう。

「俺も本は好きだからな。ミステリーものや冒険ものが多いなあ」
「ミステリーですか！」

グッとカイゼル様に顔を近づける。

「ふはっ……………！」

カイゼル様が声を上げて笑う。

「本でそんなに興奮するなんて、かわいいなあ……。エレノアが俺の家に来るときにはもつと本を増やしておくでしょう」

まだ結婚すると決まったわけでもないのに、すでに私が侯爵邸で暮らすことを想定して

いるらしい……………。

「次はエレノアの番」

「あの……カイゼル様は、お仕事がお忙しく、ほとんどお家へ帰られないと伺いました。本当でしょうか？」

「ずいぶん具体的な質問だね」

「た、たまたま耳にいただけです……………！」

カイゼル様が、私の顔を覗き込む。

「もしかして、俺のことを調べてくれたのか？」

「調べていません！」

「そこまで強く否定されると怪しいな」

「偶然です……本当に、偶然耳に入っただけです……」

「わかったよ。そういうことにしておこう」

絶対に信じていない顔をしている……………。

「家に帰らないっていうのは本当だな。軍本部でそのまま眠ることも多いし、遠征に出れば数か月帰れないこともある」

「まあ…………」

耳にしていた話と全く一緒に、嬉しくなってしまう。

あまりお家に帰ってこない旦那様……………！

図書室もあって、本も読み放題……………！

「……………どうして嬉しそうなんだ？」

ニヤニヤした顔で見えてくるカイゼル様。

「う、嬉しそうだななんて……………！……………王国のために働かれていて、素晴らしいと思っただけですよ」

「そうか？」

カイゼル様が目を細める。

口元は笑っているのに、私が何を考えているのか探られているようで、なんだか居心地が悪い。

「じゃあ、次は俺の番だな」

「はい」

「エレノアは、結婚したら夫とどう過ごしたい？」

すぐくお見合いっぽい質問がきた……。

お見合いなのだから当たり前だけれど……。

「そ、そうですね………お互いの生活を尊重するのがよいと思います」

「具体的には？」

「夫はお仕事や社交を自由になさって、妻も自分の好きなことをして過ごす………というよう

な」

「ほう。互いの生活を尊重するというのはいいな。俺もエレノアには楽しく過ごしてほしい」

カイゼル様が小さく笑った。

私に、自由に過ごしてほしい……………！

これは、結婚後も今まで通りの生活が保障されたも同然……………！

あとは……………。

「次はエレノアの番だな」

「カイゼル様は……………夜会で、多くの女性に囲まれていると伺いました」

「……………ああ、そういう時もあるな」

「女性とお食事へ行かれることも？」

「誘われれば行っていたな。ダンスも頼まれればするし、エスコートもする」

予想以上に理想的だ……………。

これなら結婚後も、私へ構う時間などほとんどないだろう。

妻として最低限のことをこなしながら、結婚前と同じ生活ができる……。

「そうなのですね……」

「また嬉しそうだな」

「う、嬉しくなんてありません……!!」

「エレノアは、俺が他の女と過ごしていても気にならないのか?」

「カイゼル様には、カイゼル様のお付き合いがあると思いますから、気にしません………」
「へえ」

カイゼル様は笑っているのに、先ほどより少しだけ声が低い。

「俺は嫌だな」

「……何がですか?」

「エレノアが、他の男と二人で食事をするのは」

「な、なぜ……」

「そりゃあ、自分の妻が他の男と楽しそうにしていたら嫉妬するだろう？」

あまりにも自然に言われ、胸が不意に大きく跳ねた。

「まだ、結婚すると決まったわけでは……！そういう未来を想像するのは早すぎるかと
……………」

「俺は、最初からエレノアと結婚の話を進めるつもりで来てるんだがな」

「……え？」

「知らなかったのか？ てっきりエレノアも俺との結婚に前向きな気持ちで会いに来てくれると思ってたんだが」

カイゼル様が楽しそうに首を傾げる。

「今日、エレノアに嫌われなかったら、そのまま結婚を申し込むつもりだった」

「そ、そんなに早く決めてもよろしいのですか？ 私たち、まだお互いのことをほとんど知りませんよね……？」

「俺はエレノアのこと、前から見てたからな」

「見ていた……？」

「いつも図書室にいるな、とか。夜会では男よりお菓子を見てるな、とか」

「そ、そのようなところを……！」

「エレノアが可愛くて、つい目で追っていた」

また、女性を喜ばせる言葉をさりと口にする。

きつと誰にでも言っているのだ。

そう思うのに、男性とそういう会話に慣れていない私は、頬が熱くなるのを止められない。

「それで？」

カイゼル様が私の顔を覗き込む。

「エレノアは、どうして俺との見合いを受けてくれたんだ？エレノアの素直な気持ちを聞か

せてほしい」

さっきのおちやらけた態度が一変して、優しくて温かい声に変わる。

「国王様と王妃様が、私のために選んでくださった方ですから……」

「それだけか？」

「……カイゼル様はお強く、お仕事にも熱心で……」

「ああ、あまり俺が家に帰ってこないから自由にできるなあとか、そういう理由か？」

カイゼル様の笑みが深くなる。

「それは、その……合ってはいるのですが、カイゼル様にとってもよいことかと……。お仕事でお家にいる日が少なくても、私でしたら文句を言いませんし……ですが、舞踏会に出たり、お客様を出迎えたり、妻としての役目はきちんと果たします……！」

「合ってるのか、素直で本当にかわいいなあ……。……エレノアは俺のことを、妻を放っておいてくれる都合のいい男だと思ってるんだ？」

「そ、そんな言い方はしておりません……………！」

「凶星っぽいな」

「っ……………！」

「まあ、どんな理由であれ、エレノアが俺を選んでくれるならそれでいいがな」

あれ？受け入れてもらえた……………？

まっすぐ見つめてくる緑色の瞳から目を逸らせない。

「俺の妻になったら、本も好きなだけ読んでいいし、家族に会いたければ、毎日会いに行ってもいい。俺の家からエレノアの実家はそう遠くないだろう？エレノアの自由を俺が制限するつもりはないよ」

「本当……………ですか……………？」

「ああ、エレノアを大切にすると誓おう」

低く、優しい声。

胸の奥が、また小さく高鳴った。

カイゼル様が私へ手を伸ばしかけ、途中で止める。

「手、触ってもいいか？」

「……どうして、わざわざ聞くのですか？」

「さっき俺が近づいたとき、少し身体が固くなっただろう？」

そんな小さな変化まで見られていたことに驚くと同時に、カイゼル様の優しさにほんの少し胸がときめく。

強くて、大胆で、強引なところもあるけど、ちゃんと私を見て、尊重してくれる。とても、いいお方だ……。

「嫌がつてるのに触れて、嫌われたくないしな」

「……大丈夫です」

私から、そっと手を差し出す。

大きな手が私の指を優しく包んだ。

「ありがとう、エレノア」

手の甲へ口づけられ、心臓が跳ねる。

「俺との結婚、前向きに考えてくれるってことでもいいか？」

「……はい。私でよろしければ」

「……もちろん、エレノアがいい」

カイゼル様と結婚すれば、国王様たちからのお見合い話から解放されるし、今までと同じ自由を手に入れられる………！

なかなか結婚しない私を心配していた、お母様やお父様も安心させられるし………！

何より、カイゼル様となら………いいかと思えたし………ほんの少しだけ………。

★★★カイゼル視点

エレノアを乗せた馬車が見えなくなるまで見送り、俺はようやく口元を緩めた。

「……まさか、本当に受けてくれるとはなあ」

そもそも、陛下と王妃様へ見合いを持ちかけたのは俺だ。

夜会では俺と目が合っただけで逃げていくくせに、王城の裏庭に迷い込んだ猫には満面の笑みを向けていた。

あの笑顔を俺にも向けてほしい。

そう思ってから、ずっと気になって仕方がなかった。

迎えに来た馬車へ乗り込むと、部下のレオルがニヤニヤしながら俺を見る。

「お見合い、どうでした？ やっぱり断られました？」

「いや。いいと言われた」

「ええ！？ 全く脈なしだって言ってたじゃないですか」

「仕事が忙しくて、ほとんど家に帰らないんですよねって、目を輝かせながら聞かれたよ」
「ふはっ！ それで、なんて答えたんです？」

「そういうことも多いな、と」

実際、これまではほとんど家へ帰らなかった。遠征や軍務が続けば、軍本部で眠ったほうが楽だったからだ。

だから、嘘は言っていない。

ただ——結婚したあとも帰らないとは、一度も言っていないが。

「まあ、エレノア様は自由に暮らしたいようですからね」

「ああ。自由は好きなだけ与えてやるよ」

けれど、放っておくつもりはない。

自分から差し出してくれた、小さな手を思い出す。

「ようやく俺の妻になってくれるんだ。もう離してやれないな、エレノア」

★★★

お見合いから結婚式までの1か月間、カイゼル様は本やお菓子を持って、ほぼ毎日のように私に会いに来た。

お仕事がお忙しいはずなのに、少し不思議だと思ったけれど、結婚すれば再び軍務中心の生活へ戻るのだらうと、私は深く考えなかった。

そして、あれよあれよという間に迎えた結婚式当日――。

無事に式を終えた私は、アルヴァ侯爵家の寝室で、寝台の上に大の字になって寝転んでいた。

それにしても、ずいぶん立派な寝室ね……。

ふかふかの寝具に身体を預け、ぼんやりと天蓋を眺める。

明日は、まず図書室を案内してもらおう。

それから、お父様とお母様に無事に式を終えたお手紙を書いて、お昼には王妃様のところへ顔を出して――。

「随分くつろいでるなあ、エレノア」

「ひゃあっ!？」

突然聞こえた声に飛び上がる。

寢室の扉の前に立っていたのは、つい先ほど夫になったばかりのカイゼル様だった。

「ど、どうしてここに……!」

「どうしてって、自分の寢室に来るのは普通のことだろ？」

「自分の……寢室……!?!」

「なんだ。夫婦なんだから、一緒に寢室で眠るのは当たり前だろう？」

「……そ、そうですね。部下の方と話し込んでいられたので、そのままお仕事へ戻るのか
とっていました……」

「そんなわけではないだろ」

カイゼル様が笑いながら扉を閉める。

「ようやくエレノアを俺の妻にできた、初めての夜なのに。仕事へ戻るわけないだろ」
「初めての、夜……」

「ああ。今夜は朝まで、楽しもうな……?」

軍服の上着を脱ぎ、近くの椅子へ無造作に掛ける。

その下に着ていた黒いシャツは、厚い胸板や逞しい腕の形をはっきりと浮かび上がらせていた。

どうして、上着を脱ぐ必要があるのかしら。

眠るため……?

そうよ。一緒にの寝室で眠るのだから、着替えるのは当たり前だわ。

「一緒に眠るだけ……ですよね?」

私が尋ねると、カイゼル様の手が止まった。

エメラルドグリーンの瞳が、ゆっくりと私へ向けられる。

「エレノア、それ本気で聞いているのか?」

「えっ……?」

「夫婦になった最初の夜に、新婚の夫婦がやることなんて1つに決まってるだろ？」

楽しそうに口元を緩めながら、カイゼル様がこちらへ歩いてくる。

一歩近づかれるたび、なぜか心臓の音が大きくなった。

「どうやらわかってないみたいだから、教えてやろう。口づけして、服を脱がせて……エレノアの体を朝までたっぷり可愛がる」

「……………！」

そこでようやく、カイゼル様の言う「初めての夜」が何を意味するのか理解した。

「しょ、初夜……………！」

「その様子だと、本当に忘れてたみたいだな。さすがエレノアだ」

「あ……………それは……………」

「まあいい。エレノアの新鮮な反応が見られるから逆によかったかもな」

寝台の前まで来たカイゼル様が、私のすぐ隣へ手をつく。
大きな身体に覆われ、視界がすべて彼で埋まった。

「ちよ、ちよっと待ってください……………心の準備が……………！」
「心の準備？」

男の人に触られることは、今も好きではない。

けれど、この一か月、カイゼル様が私に触れても、以前ほど身体が固くなくなっていた。

頭を撫でられたり、手を握られたりするたびに、胸がドキドキすることも増えた。

だから、カイゼル様との初夜が嫌なのかと聞かれたら、嫌というわけではない……………。ただ、今夜そんなことをするなんて、全く考えていなかっただけで……………！

「じゃあ、ゆっくり触っていくから、怖くなったり痛かったりしたらすぐ教えてくれ。そうすれば、エレノアも心の準備ができるだろう」

「それ……………なら……………」

カイゼル様の圧に負けて、こくんと頷いてしまう。
じっと見つめられ、そのまま軽くキスされる。

「……………ん……………」

初めての行為に緊張して体をガチガチに固めてしまう。

「エレノア、もっと体の力を抜け」

「ひゃいっ……………」

力を抜けて言われても、緊張しちゃって…………ドキドキしちゃって、無理っ……………！

「……………もしかして、エレノア、こういうこと自体が初めてか？」

「……………そう……………です……………」

「そういうのは、最初に言うんだぞ。俺との行為が怖くて、体をガチガチにしてると思った

じゃないか」

「それはっ……違いますっ……！！」

反射的に強く否定してしまう。

「思ったより、俺に心を開いてくれているみたいで、嬉しいな………エレノア、俺の目を見て」

「……………」

「エレノアを傷つけるようなことはしない。だから安心して、俺にすべてを委ねてほしい」
まっすぐな瞳で見つめられ、とくとんと心臓が大きく鳴る。
それと同時に、すべてを委ねてしまいたいと思った。

「力が抜けてきたな。いい子だ、エレノア」

頭を優しく撫でられ、さっきと同じ軽いキスを繰り返される。

「んっ…………ふっ…………♡」

ぎゅっと強く抱き締められながら、顔の角度を変えて、何度もキスされる。大きくて少し硬い体……カイゼル様って、こんなに大きいんだ……………。
キスがどんどん激しくなっていく。

「エレノア、俺に合わせてキスしてごらん」

「んっ…………ふぁっ…………んっ…………ふうっ…………♡」

言われた通り、カイゼル様の動きを真似する。

ハムハムと唇を噛んでくる動き。

カイゼル様の唇、柔らかくて、気持ちいい……。

「ふっ……………!!んっ……………ふぁあんっ…………♡!!」

口の隙間から、カイゼル様の舌がにゆるっと入り込んできて、びっくりして思わず顔を離そうとするが、軽く頭を押さえられて逃げられない。

「んふっ……………あうっ……………んっ……………ふうっ……………♡！！！」

カイゼル様の舌から逃げようとしても、すぐ捕まってしまう。

何これえ……………知らないっ……………こんなエッチなキス、知らないいい……………

♡

長いキスで苦しくなり、思わずカイゼル様の硬い胸板をどんどん叩くと、ようやく顔を離してくれた。

「はあ……………んっ……………ど、どうして、カイゼル様は、息切れしてない……………のですか……………」

あんなに深くて長いキスしたのに、なんで、私と落ち着き方が全然違うのっ……………！

「エレノアは、こういうキスも初めてなのか……可愛いなあ……鼻で息すればいいんだ。ほら、やってみろ」

ちゅづ……クチュづ……ちゅつ……ちゅくづ……♡

鼻でっ……いきっ……。

「ふうづ……んんづ……んんづ……♡」

さつきより、キスに集中できるようになったけど、これはこれで、エッチすぎてだめっ……！！

「ん、上手に鼻で呼吸できるようになったじゃないか」

はふはふと一生懸命息を整えていると、頭を支えられながら押し倒される。覆い被さってきたカイゼル様と目を合わせると、片側の口角を軽く上げて少し意地悪そ

うに笑いかけてくる。

月明かりに照らされた姿は色気たっぷりで無意識に下腹部がきゅんと疼く。

「どうした？そんなに俺のこと見つめて」

「やっ……………なんでも……………ないです……………」

「そうか？してほしいことがあったら言ってごらん。エレノアの可愛いエッチなお願いなら聞いてあげるから」

「そ、そんなお願いしませんっ……………」

「はいはい」

「エレノアのエッチなお願い、楽しみだなあ……………」

そう言いながら、私の首筋に舌を這わせ始める。

皮膚の薄い首筋を舐められると、体がゾクゾクして、何も考えられなくなる。

「んっ……………やあんっ……………♡」

首筋を舐められながら、ワンピースの裾をどんどん上にたくし上げられる。

内腿を撫でられるのも、お腹を撫でられるのも気持ちいい……………。

知らないっ……………撫でられるだけで、こんなに気持ちいいなんて、知らないっ……………！

「綺麗な肌だな。男の俺とは大違いだ。軽く擦っただけで、綺麗なピンク色に染まるのもたまらないな」

私の肌を撫でながら、じっと見つめてくる。

「少しでも体を起こしてくれ」

そう言って、腕をグッと引っ張られる。

首筋を舐められただけで、この気持ち良さなのに、もつと敏感なところに触れられたら、どうなってしまうの……………！

そんなことを考えているうちに、ばんざいと言われ、ブラジャーとパンツだけにされてしまう。

「きゃあっ……………！」

「協力してくれてありがとな」

腰に手を回され、カイゼル様に背中を向ける体勢にさせられる。

まだ、肝心なところは見えてないけど、恥ずかしくて、思わず、腕を胸の前で組んでしまう。

「手はここだろ？」

腕を掴まれ、体の横へ移動されてしまう。

「でもっ……………見えちゃうっ……………だめっ……………心の…………準備……………」

「じゃあ、準備できるまで、上から触ることにするか。エレノアの心の準備ができたなら教えてくれ」

「ん……………？」

薄手で、わずかに透けるレースのブラジャーの上から撫でられる。
大きな手で揉まれながら、首筋、鎖骨を舐められる。

「ふっ……………んっ……………」

揉まれるたびに、胸の先端が擦れて、未経験の感覚に襲われる。
擦れて……………もどかしい……………。

「ん…………エレノアの乳首は、素直に俺に気持ちよくしてほしいと言ってるみたいだな」
「……………そ、そんなわけではないです……………！」

反射的に拒否した瞬間、先端を円を描くように撫でられ、出したことのない甘い声が漏れてしまう。

「あ…………んっ……………♡んっ……………ふっ……………♡だめえ……………♡」

乳首……変……だめえ……♡!!!

「ほら、甘い声が出たじゃないか。気持ちいいな、乳首」

はっきり気持ちよくなってる部分を指摘されて、恥ずかしくて、涙目になる。
こ、こんなエッチなことするなんて……!!
でも……気持ちいい……カイゼル様に言えないけど……気持ちいい……♡

「んっ……ふっ……♡」

気持ちいいけど……焦れたい……!!

気持ちよさが、ずっと積み重なっていつている感じ……。
乳首を弄っていない方の手が、お腹、太ももを撫でていく。

「はうっ……んんっ……♡」

内腿を撫でている手が時々、おまんこに触れてきて、びっくりしてしまふ。

だめっ……………そこはだめっ……………♡！！

カイゼル様に言えないけど、エッチなキスされた時から、おまんこぬるぬるしてて、バレたくないのっ……………！！

それ以上、内側に来ないでと、膝を立てた状態で太ももをぎゅっと閉じようとするも、大きな手で止められて、閉じられないっ……………！！

ぬちっ……………ぬこ……………ぬこっ……………♡

「あれ？エレノア、おまんこぬるぬるしてないか……………？」

「やっ……………ああ……………して……………ないっ……………」

「じゃあ、この音はなんだ？」

「ふっ……………んんっ……………♡！！！」

濡れてる密穴部分を下着の上から撫でられて、しかも、敏感なクリトリスも弄られる。

だつめ……………そこっ……………そこだめっ……………敏感なのっ……………♡！！！！

「あ……………うう……………♡！！！！」

「エレノア」

「……………ひゃい……………？」

「心の準備の方はどうだ？そろそろ俺にすべてを見せる気になったか？」

ぽつたり勃起始めている乳首を布の上からきゅっと摘まれ、おまんこの敏感なクリトリ
スもコリコリ揺すられながら、レロレロと首筋を舐められる。

「……………やあ……………恥ずかしいっです……………！！」

濡れてるところ見られちゃうなんてっ……………普通に見られるより、恥ずかしいい……………！！

「そうか、まだ恥ずかしいか。エレノアの心の準備ができるまで、いつまでも待ってるから
な」

カイゼル様の微笑みが、悪魔のように思えてくる。

い、いつまでも……………！？

でも、私が折れなければ、なんとか体を見せないで、今日をやり過ごせるかも……………？
そんなことを考えている間も、乳首、おまんこを弄られて、甘い吐息が漏れる。

「んんづ……………ふあんづ……………♡」

なんか、さつきから、ずっと、おまんこ乳首がじくじく疼いて、もどかしくなってきた……………。

も、もっと強く弄って……………ほしい……………。

「どうした？エレノア。さつきから俺の指に、おまんこを擦り付けてるようだが」
「……………！！！！ち……………が……………」

クリトリスを強めに左右に揺すられて、何かが弾けそうになる。

「んああっ……………♡!!!」

らめ……………なんか、きちゃうっ……………♡!!!
気持ちいいのきちゃうっ……………!!

「ふっ……………んんづ……………あううづ……………♡♡♡」

頭が真っ白になって、何かが弾けそうになる。

怖いっ……………でもっ……………もっとほしいい……………♡

もっと、弄って……………♡

くる、くるーそう思っていたのに、クリトリスを弄っていたカイゼル様の指が離れて
いってしまふ。

「……………なんれっ……………!あと……………ちよつとで……………」

「あとちよつとで?」

「あ……う……なんでもないです………」

「そうか」

そう言っ、またクリトリスを左右に揺すられる。

「あうう……♡……らめっ……らめっ……♡……！！！」

もつと……やめないでえ……♡！！

心の中で願うだけで、声に出せないの、当然、カイゼル様に伝わるはずもない。
何かが弾けそうになるところまで追い詰められて、ぱっと体から手を離すカイゼル様。

「やあっ……♡！！」

「……じゃあ、今日はこのへんでやめておくか。エレノアがいよいよしてるのに無理に関係を進めて嫌われたくないなあ……」

ポンポンとお腹を撫でて、離れて行こうとするカイゼル様。

「だ……………めっ……………！」

「……………ん？どうした、エレノア」

太いカイゼル様の腕を掴んで、無意識に引き留める。

「やめるの……………だめ……………」

「だめ？じゃあ、エレノアは、どうして欲しいんだ？」

耳奥まで、甘くて優しい声が響いてくる。

「も、もっと……………」

「もっと？」

「も、もっと気持ちよくして欲しいです……………」

「やっと自分からおねだりしてくれたな」

大きな手でポンポンと撫でられる。

素直になれたことを褒められて、嬉しくなる。

「さっきの気持ちよかったか？」

言葉にするのが恥ずかしくて、無言で首だけ縦に振る。

「そうか、よかった。もうそろそろ心の準備はできたか？」

「……………でき……………ました……………」

お腹に手を回されて、ぎゅっと抱き締められながら答える。

早く……………早く……………さっきの焦らしからずとおまんこが疼いてて辛い……………！

「はあ……………可愛すぎるな、エレノア。おねだりできたご褒美にいっぱい気持ちよくしてやるからな」

